福厳寺第十九世 大僧正

石井祐澄和尚 本葬儀

真言宗豊山派

普賢山地蔵院福厳寺

傳燈大阿闍梨　大僧正　石井祐澄大和尚

普賢山地蔵院福厳寺第十九世
梅香山菅相院円福寺第十九世

遷化　令和三年六月二十日
世壽　九十一
法臈　七十四夏
密葬　令和三年六月二十九日　於 福厳寺
本葬　令和三年九月二十八日　於 こころ斎苑 黒岩

「法話」撮影 森藤哲良（福島県勤労者写真展　福島中央テレビ社長賞）

密葬と通夜の
様子はこちらから
ご覧になれます

https://fukutera.com/yucho/

本葬儀次第

先上堂
次開式之辞　大導師　田代弘興猊下
次奠供　真言宗豊山派宗務総長　鈴木常英台下
次勅徳文　福島県第一号宗務支所長　阿部有恒僧正
次弔辞
次弔電奉呈
次謝辞　法嗣　石井祐聖
次指名焼香
次理趣経
次先師尊霊勅徳和讃
次阿弥陀如来根本陀羅尼
次光明真言
次南無祐澄大和尚尊霊
次廻向
次御垂辞　大導師　田代弘興猊下
次閉式之辞
次退堂

石井祐澄大和尚　経歴

出生	昭和6年11月21日
入寺	昭和13年4月1日　父 石井祐順・母 ミエ　（長男）
得度	昭和21年3月17日　円福寺
度牒	昭和21年12月10日　福厳寺道場（随戒師 石井祐海）
加行	昭和26年12月27日　福厳寺道場（随阿闍梨 石井祐海）
灌頂	昭和30年10月7日　観智院道場（随阿闍梨 橋本龍空）
伝法大会	昭和44年10月19日　総本山長谷寺（探題 平林宥高猊下）
便壇	昭和44年11月16日　与楽寺道場（開壇阿闍梨 長岡慶信猊下）
中性院流	平成4年10月14日　総本山長谷寺（随阿闍梨 吉田俊誉猊下）
住職	昭和40年3月30日　円福寺（福島県伊達市保原町）
	平成4年2月10日　福厳寺（福島県伊達市伊達町）
僧階	昭和31年9月8日　権律師
	昭和49年1月8日　少僧正
	昭和60年1月8日　中僧正
	平成4年1月9日　権大僧正
	平成21年6月18日　大僧正
菩提院結衆	平成14年9月9日
集議	平成23年2月28日
表彰	平成17年1月27日　布教功労章
	平成17年11月3日　瑞宝双光章
	平成18年10月27日　密教教化賞
	平成22年11月4日　教学振興会功労賞
	令和3年6月20日　従六位
学歴	昭和27年3月　福島大学教育学部卒業
	昭和29年3月　大正大学仏教学部仏教学科卒業

役務	昭和38年　福島県仏教青年会　会長
	昭和40年6月25日　福島県第一号宗務支所　常任布教師
	昭和46年4月1日　本山特派布教師　二等巡教師
	昭和49年4月1日　本山特派布教師　一等巡教師
	昭和55年2月1日　青少年教化資料編集委員
	昭和55年4月1日　青少年教化委員
	昭和55年10月20日　青少年教化指導員
	昭和56年12月21日　御遠忌報恩伝道団　団員
	昭和57年4月1日　豊山教職員連盟　常務理事
	昭和58年7月25日　弘法大師千百五十年御遠忌法要　職衆
	昭和58年12月3日　宗会議員
	昭和59年6月12日　福島県第一号宗務支所協議員
	昭和59年10月1日　豊山教職員連盟　支部長
	昭和62年12月14日　宗務総合庁舎建設委員会　委員
	昭和63年6月12日　福島県第一号宗務支所　副長
	昭和63年12月1日　布教研究所　研究員
	平成4年2月25日　興教大師八百五十年御遠忌法要　職衆
	平成5年6月10日　制度調査会　委員
	平成5年7月1日　教化推進会議　委員
	平成7年4月11日　現代教化研究所　所長
	平成12年12月13日　教化布教方針策定審議会　委員
	平成13年4月1日　寺院教会所得調査中央委員会　委員
	平成13年5月20日　同和推進委員会　委員
	平成15年4月1日　総合研究院現代教化研究所　指導教授
	平成15年4月15日　専誉僧正四百年頼瑜僧正七百年御遠忌法要　職衆
	平成15年5月1日　出版審議会　委員
	平成15年6月25日　制度調査会教化センター専門委員会　副委員長
	平成15年6月27日　同和推進委員会　研究班長

山内整備

昭和53年　庫裏新築
平成2年　本堂改修　客殿新築
平成8年　新墓地造成
平成10年　庭園整備
平成17年　位牌堂改修　護摩堂新築
平成19年　先師寺族墓地整備
平成20年　大壇寄贈（祐晃得度式）

各種団体

昭和29年4月1日　学法福島電気工業高校　教諭
昭和38年4月1日　県立福島第二高校　教諭
昭和46年4月1日　伊達町社会教育委員
昭和49年10月1日　伊達町民生児童委員推薦会委員
昭和51年4月1日　県立保原高校　教諭
昭和51年4月1日　人権擁護委員
昭和52年1月1日　伊達町文化財保護審議委員
昭和53年9月20日　保護司
昭和56年7月22日　伊達町史編纂委員会委員
昭和57年5月1日　伊達町青少年問題町議会委員
昭和57年5月1日　伊達町社会福祉協議会理事
平成2年2月1日　人権擁護委員福島協議会川西部会会長
平成3年5月1日　人権擁護委員福島協議会副会長
平成4年5月25日　伊達町社会福祉協議会副会長
平成5年3月25日　伊達町ふるさと会館運営審議会委員
平成5年4月1日　伊達町文化財保護審議会副会長
平成6年4月1日　伊達町生涯学習推進会議委員
平成6年5月25日　伊達町社会福祉協議会会長
平成7年12月14日　伊達町情報ネットワーク構想策定委員
平成8年5月1日　人権擁護委員福島協議会川西部会会長
平成11年2月25日　伊達町ケーブルＴＶ放送番組審議会会長
平成11年5月26日　伊達地区保護司会副会長
平成11年10月21日　伊達町うつくしま未来博推進協議会会員
平成12年4月24日　伊達町ふるさと創生懇談会委員会会長
平成12年5月24日　公益財団法人仁泉会評議員
平成12年10月17日　伊達町振興計画審議委員
平成18年5月1日　伊達市看護保険事業計画査定委員会委員長
平成18年5月1日　伊達市地域支援センター運営協議会会長

平成15年9月11日　福島県第一号宗務支所総登嶺御遠忌法要　職衆
平成15年11月10日　豊山教職連盟論義法要　会奉行
平成15年11月12日　専誉僧正四百年頼瑜僧正七百年御仏事法要　職衆
平成16年6月14日　総本山長谷寺　顧問
平成16年6月14日　総本山長谷寺文化財等保存調査委員会　委員
平成16年6月16日　豊山教職員連盟　副会長
平成16年11月9日　鳥居慎誉管長猊下晋山式　職衆
平成17年2月1日　教化布教方針策定審議会　委員長代行
平成17年9月27日　制度調査会教化専門委員会　副委員長
平成18年10月1日　豊山流大師講福島教区　本部長
平成19年4月20日　豊山流大師講　監事
平成19年9月3日　制度調査会教化専門委員会　委員長
平成20年2月27日　本山特使
平成20年2月29日　中央布教師会　副会長
平成20年8月1日　総本山長谷寺護持整備委員会　副委員長
平成20年11月7日　小野塚幾澄管長猊下晋山式　職衆
平成21年4月1日　寺院所得調査中央委員会　委員
平成21年5月1日　出版審議会　会長
平成23年4月1日　布教方策検討委員会　委員
平成26年4月1日　豊山教職員連盟　会長

〈遺稿〉夢の彼方に

福厳寺第十九世名誉住職　石井祐澄

奇跡のいのち

昭和6年11月、弘法大師のご縁日である21日に、私は生まれた。母の話によると、逆子による異常分娩だったという。生まれ落ちてからの30分間は、ずっと仮死状態のままで、「この子は助からないに違いない」と、誰もが観念したらしい。

そんな時、弱々しく、せき込むような声が、小部屋に響いた。小さな命が、たしかな鼓動を打ち始めたのである。青ざめた顔に赤みがさし、泣き声が徐々に大きくなっていく。母は、大粒の涙を流して喜んだそうだ。

父祐順、母ミエ、姉キミとともに

道は見つかった

大田小学校（福島県伊達市保原町）から旧制保原中学校に入学したのは、太平洋戦争が、いよいよ激しさを増す昭和19年の春だった。時代が大きく変わるなか、新制高校の第2回生として卒業した私は、地元の福島大学に進み、さらに、僧侶としての勉学にはげむため、大正大学（東京都豊島区）の仏教学部に編入学した。不安をかかえて上京した私は、住み込みで働くこととなった荘厳寺（東京都渋谷区）の門をたたいた。そこは、当寺、真言宗豊山派の管長であられた網代智海猊下のご自坊であった。

荘厳寺での新しい生活にも慣れたある日、網代猊下のご親修があり、私が随行することとなった。そこで、出会ったのが、岡田杲師僧正である。岡田僧正といえば、当代きっての名布教師である。名調子の説法と、心に染みる法要解説に、私は、ただただ感動するばかりだった。そして、「岡田僧正のような立派な布教師になりたい」と、見果てぬ夢を抱いたのである。

夢にむかって

僧侶としての若き日の思い出は、地元に仏教青年会を組織したことである。佐藤智仙師（泉性院）、横田聖峰師（不動寺）、橋本龍弘師（医王寺）とともに、機関紙「ながれ」を発刊するなど、教化活動に努めた。また、豊山派福島県仏教青年会の誕生にも参画し、会長に就任することとなった。

教師との「二足のわらじ」は、38年に及んだ（全日制高校に9年、定時制高校に29年間奉職し、平成4年に定年退職）。多忙な教員生活だったが、見果てぬ夢である布教師としての活躍を、あきらめたわけではない。むしろ、その思いは、つのるばかりであった。

その夢は、昭和47年に実現する。総本山長谷寺で開催された第1回牡丹期布教に、声をかけてもらったのである。

名布教師との出会い

それは、テント張りの野外布教所での法話だった。そうした形態の布教は、まったく経験がなく、人々の足を止めるのに一苦労だった。のどはカラカラで、ブルブルと体も震え、どんな話をしたのか、今でも思い出せない。まさに緊張の連続だった。

田代弘範僧正は、『仏教における布教法』の著者として知られる。そんな田代僧

総本山長谷寺の歓喜院にて

正とテントで席を同じくすることができたのは、とても貴重な経験だった。

それからの15年は、豊山派を代表する名布教師の方々との出会いが、総本山長谷寺の牡丹期布教で続いた。権田快寿師、山口恵暁師、田中量賢師、石井聖巳師、鴨志田秀純師、吉野孟彦師、中村啓識師、大西信康師、吉田生而師、川田聖戒師、栗山秀純師、田代弘興師、岩田秀孝師、伊東聖純師、佐藤龍剛師、菅野秀浩師、渋谷隆阿師など、名前を挙げればきりがない。やがて、宗派の内外で布教活動の場が私に与えられることになるのだが、そのきっかけは、牡丹の花咲く長谷寺での布教だった。

坐禅する子供らの背に蝉しぐれ

住職をつとめる福厳寺で、護持会の初代会長に就任されたのは金子宜三氏である。金子氏ほど、熱心な仏教信者には、出会ったことがない。お寺に来ると、勤行や御詠歌の説明を求め、運転する車には、常にお経と御詠歌が流れていた。とりわけ関心を寄せたのは、坐禅である。じつは、私も、真言宗の阿字観法と呼ばれる坐禅に興味をいだいており、それを檀信徒に実修してもらおう、と考えていた。私と金子会長が、坐禅会の開催について意気投合するのは、必然のことだった。

「さっそく始めよう。そうだなあ、夏休みの早朝坐禅会というのはどうだ」という金子会長のひと言で、昭和46年夏に、福厳寺の坐禅会はスタートする。参加者は19名であり、ほんとうに、ささやかな坐禅会であった。

その後、次第に参禅者が多くなり、やがて１００名の檀信徒が集まるようになる。金子宜三初代会長からバトンを受け継いだ金子與志雄護持会会長も、お父さま同様に寺門興隆に寄与され、絶大なお力添えをいただいている。

昭和63年夏号の布教誌『光明』（「あの寺この寺」のコーナー）では、「坐禅する子供らの背に蝉しぐれ」と題して、福厳寺の坐禅会が紹介された。

猛暑の中の研修会

坐禅会の地道な活動が認められて、豊山派青少年研修会の指導員に命じられたのは、昭和47年のことである。高山宥進教化部長の提唱で始まった研修会は、仏道体験を通じて豊かな感性を磨くことを目的としていた。

当時の歴代教化部長は、吉田俊誉猊下が地方研修会を開設し、門屋大寿台下が指導者講習会を発足され、さらに、鴨志田秀純師と高梨宥興師が、研修会の内容をさらに充実発展させた。

それから連続15年にわたり、子供たちとの「ふれあい」は続いた。猛暑の中の総本山長谷寺をはじめ、四国や北海道など、気がつくと、夏休みといえば全国を駆け回る日々であった。

猛暑の季節を迎えると、なぜか胸騒ぎをおぼえてしまう。それは、青少年研修会で奔走した昔の名残りかもしれない。夏が一番好きな季節になったのも、青少年研修会のおかげである。

鴨志田師（中央）、田嶋師（左）、そして私

心のぬくもり

私は、20年にわたって、人権擁護委員や保護司をつとめ、さまざまな人間模様を見つめてきた。平成9年には、全国保護司中央研究協議会で、「お地蔵さんのように、いつも温かく見守りつづけ、心のぬくもりをもった保護司でありたい」と、発表した。

みんなが幸福に暮らせる、社会福祉の充実が叫ばれるなか、私は、伊達町社会福祉協議会の会長に推され、老人介護やボランティア活動の推進にもかかわった。

本宗派では、平成7年に教化センターが設立され、新設の現代教化研究所が誕生した。青少年から高齢者にいたるまでの諸問題に、ささやかながら対応してきたからなのか、初代の現代教化研究所所長を、私が拝命することとなった。平井宥慶主任研究員(当時)を中心に、現代社会の実情を調査し、宗団の教化推進につて検討を進めることができた。

ただ感謝あるのみ

「お父さん、私たちが留守番をしますから、旅行に出かけてはどうですか」

嫁さんの優しい言葉がきっかけとなり、私たち夫婦は、各地を旅することにした。中国の青龍寺、娘夫婦が勤務するニューヨーク、韓国の古刹、アンコールトムの仏教遺跡など、海外旅行の思い出は尽きない。また、京都や鎌倉などの古寺めぐりなど、国内旅行も夫婦の恒例となった。

「定年退職したら四国遍路をしろよ」という両親の勧めもあり、平成5年の春に、四国八十八カ所霊場の遍路を発願した。その年は、寒さが続いて桜の開花が進まなかったことから、どこに行っても桜が私たちを迎えてくれた。まさに、「お四国は花から花への遍路道」である。

秩父霊場巡拝

また、御詠歌講員の希望に応え、6年かけて百観音巡礼を成満し、観音さまとの深い仏縁を結ぶこともできた。慈悲のあかりに照らされながら、清らかな仏の道をみんなと一緒に歩んでいけば、少しずつ、仏さまに近づくことができる。それを確信した巡礼だった。

90年あまりに及ぶ人生を振り返れば、見てみて見果てぬ夢を追い続ける毎日だった。母は、「我が人生に悔いなし。ただ感謝あるのみ」とメモを残し、あの世へと旅立った。私の思いも、そんな母と、まったく同じである。

「終活の 最期の一言(ひとこと) ありがとう」

巡り会った多くの方々に、ただただ感謝あるのみである。

追悼のことば

「山のように海のように」

葬儀委員長　小野博英

石井祐澄大僧正の訃報に接し、福厳寺檀信徒一同は、深い悲しみと大きな驚きを禁じ得ません。本年4月、ご子息である祐聖僧正が福厳寺の新住職となり、大僧正は第一線を退かれました。とはいえ、これまで同様に檀信徒の教化に邁進されており、このようにお別れの日を迎えようとは、信じられない思いです。

祐澄大僧正は、気さくなお人柄でありました。偉ぶることがなく、いつも笑顔で檀信徒と接し、優しい言葉をかけてくださいました。檀家の葬儀では、必ず弔句を奉呈されるなど、細やかなお心遣いも随所に頂戴いたしました。軽妙な語り口の法話は、まさに大僧正ならではのものであり、葬儀でも法事でも、私たちは夢中で聞き入り、深い感銘をおぼえたものです。

山のように高く、海のように深い大僧正の恩徳に報いるため、盛大な檀信徒葬をもって大僧正を見送りたいところですが、新型コロナウイルスの感染拡大により、密葬と荼毘は、近親者と護持会理事のみにて営みました。

とはいえ、別れを惜しむ方々の気持ちに応えるため、6月28日の通夜と、29日の密葬では、それぞれ3時間の枠を設け、大僧正と最後のお別れをしていただきました。両日とも、檀信徒を中心に、大勢のみなさまにご会葬を賜り、改めて、大僧正が幅広く慕われていたことを、実感いたしました。

また、本葬儀に先立つ4日間、福厳寺と円福寺に記帳所を設けましたところ、数多くの檀信徒にご来賀いただき、御香資を頂戴いたしました。みなさまのご厚情に対し、心から厚く感謝を申し上げます。

本葬儀は、田代弘興猊下を大導師に仰ぎ、檀信徒葬の礼をもって執り行います。祐澄大僧正が敬愛する田代猊下に、本葬儀の導師をお勤め賜ることは、福厳寺檀信徒にとりましても、誠に感謝に耐えません。感染症対策を徹底し、法要時間の短縮など十分な配慮のもと、安心安全な本葬儀を執行いたしたく存じます。

さて、祐澄大僧正は、庫裏の新築から始まり、本堂の大改修と客殿の新築、新墓地の造成、庭園の造営と、次々に大事業を完遂され、さらには位牌堂の改修と護摩堂の新造も手がけるなど、福厳寺の護持整備に尽くされました。

また、保護司や人権擁護委員を永年に渡ってお務めになり、平成17年に瑞宝双光章の栄に浴されましたことは、福厳寺の檀信徒にとりましても、大いに誇りとするところです。

祐澄大僧正のご遷化は、大きな損失ですが、茫然自失のままではいられません。祐聖僧正と祐晃僧都は、大僧正の遺志を受け継ぎ、布教教化にめざましい活躍をされています。檀信徒一同、これまで以上に協力を惜しまず、菩提寺の発展に微力を尽くしてまいります。

祐澄大僧正には、私たちの廻向の誠を十分におくみ取りいただき、これからは密厳浄土の彼方から、福厳寺の隆昌と故郷の繁栄を暖かくお見守りくださいますよう念じまして、追悼のことばといたします。

父を追悼して

「死ぬのは、あまり怖くない」

福厳寺住職　石井祐聖

5年ほど前から、父は、極楽について盛んに語るようになりました。法話のとき、好んで取り上げたのは、次のような話です。

いい歳になりました。これまでに関わったお葬式は、かなりの数になります。一生懸命お経を唱え、丁寧に引導の作法をしたから、私が見送った檀家さんは、みんな極楽に往生してますよ。

まもなく、あの世からお呼びがかかります。極楽に行ったら、私は真っ先にこう言うんです。

「福厳寺第19世石井祐澄、ただいま参上！」

その声を聞いた極楽の檀家さんたちはワーッと集まって来て、「待ってたぞー」とばかりに、私をもみくちゃにするんです。それを考えると、ほんとにワクワクしますね。

私の祖父は、3人の妻を迎えました。その中で自分と血がつながっているのは、最初の奥さん、テツです。テツは30歳という若さで、大正時代に亡くなりました。私は、会ったことがないんです。

だから、極楽に着いたら、でっかい声で叫びます。

「テツばあーちゃーん」

ってね。もし、テツが現れたら、たぶん、無我夢中で抱きつくんじゃねえかなあ。

最近、死ぬのが、あまり怖くなくなりました。極楽でやりたいことがあるからです。死んであの世に行くのが楽しみだなんて、いいもんでしょ。

歳をとるのは悪いことじゃないって、つくづく思いますよ。自分の死を前向きに考えられるのは、老いて、あの世が身近になったからです。

法話を聞いた若者が、すぐさまたずねました。

「極楽っていうのは、そんなにいい所なんですか？」

父の答えは、こうです。

「そこに行って、また、この世に戻ってきた人は、誰もいない。ということは、極楽ってのは、すごくいい所なんだよ」

そんな元気な父が、体調の不良をうったえ、入院したのは今年の5月1日でした。それから50日目に容体が急変し、父は、ことのほかあっけなく、帰らぬ人となりました。

「死ぬのはあまり怖くない」とか、「極楽でやりたいことがある」と繰り返し、「あの世に行くのが楽しみだ」と、明るく語っていただけに、いかにも父らしい、ためらいのない旅立ちであった、とも思えます。

弔問に訪れた檀家さんが、ポツリとつぶやきました。

「極楽に行くのを、あんなに楽しみにしてたんだから、いまごろ、きっとニコニコですよ」

その言葉に、私たち家族の悲しみは、癒されました。

父にとって最後の説法となったのは、4月29日の法話です。内容は、自分が極楽に行ったらやりたいこと、といういつもの話でした。

「テツばあーちゃーん」

大きな声でそう叫んだ父の顔は、まぶしいぐらいの笑顔でした。

祐晃得度式（平成20年4月）

講報「ごえいか」106号より抜粋

祖父を追悼して

「名布教師、最後のことば」

円福寺住職　石井祐晃

祖父が亡くなる前日のこと。

家族がみんな揃ってお見舞いに行くと、祖父の呼吸はかなり浅く、意識は朦朧としていて、とても会話ができる状態ではなかった。

僕たち三人の孫は、口々に「みんなで来たよ」、「具合はどう」などと声をかけた。祖父は目を瞑ったままで、これといった反応はない。それでも、励みになればと、僕たちは祖父の身体を優しくさすることにした。

身内とはいえ、その身体をベタベタ触ることは、これまで、まったくなかった。いろんな所をさすっていると、祖父の二の腕がとても柔らかいことに気づいた。なんとも言えない弾力がある。

姉と一緒に「ぷよぷよしてるねぇ」と言いながら、同じ所を何度も触っていた。すると、祖父がピクッと反応を見せた。それを、姉は見逃さなかった。

「おじいちゃん、くすぐったいの？」

問いかけに、それまでは目をかたく閉じ、まったく反応を示さなかった祖父が、こくりと頷いた。「ごめん、ごめん」と、姉は慌てて手を引く。

その光景は、まるでおじいちゃんと孫が遊んでいるかのようだった。病室にいるみんなが、とても温かい雰囲気に包まれた。

本当に嬉しかった。

その弱々しくも確かな頷きは、僕たちの声が聞こえていて、僕たちの温もりを感じているという、まぎれもない祖父の「ことば」だったからである。

僕たちは、ずっと不安だった。

どれだけ言葉をかけても反応がないため、自分たちの気持ちは、はたして伝わっているのか、という不安が消えなかった。そもそも耳は遠くなっていて、目を開ける気力も乏しく、たぶん届いてないのだろう、という諦めの方が大きかった。苦しむ祖父を前に、何もできない現実と対峙すると、無力感にさいなまれるほかなかった。

そんな時に、祖父はメッセージをくれたのだ。「しっかり聞こえてるぞ」、「孫の声を聞けてよかったよ」、「さすってくれて、ありがとう」と。

憶測かもしれない。それでも、無力さに打ちひしがれる僕らを励ますその頷きは、奇跡とさえ思えた。

家族みんなに囲まれて安心したのか、その翌日、祖父は息を引き取った。できるところまで頑張ったら、あとは自然に任せる。なんとも祖父らしい最期だったように思う。

弔問に来た方々から、祖父の話を聞き、様々な一面を知ることができた。

厳しい師匠、面倒見のいい兄貴分、気心の知れた親友、愛情たっぷりの先生、茶目っ気あふれる住職。どれも石井祐澄そのものだ、と思った。

確かに、祖父は、先生であり、大僧正であり、集議である。しかし、僕にとっては、そのどれでもない。僕にとっての石井祐澄は、おじいちゃんだ。孫の成長を見守り、いつも喜んでくれるおじいちゃんなのだ。

だからこそ、もっともっと精進し、さらに成長した姿を、旅立った祖父に見せたい。そして、「さすが俺の孫だ！」と、喜んでほしい。

それが、僕の希望であり、祖父への恩返しであり、バトンを受けた覚悟である。

円福寺施餓鬼会（令和元年9月）

終活の最期の一言ありがとう

ことば　石井祐澄
イラスト　中山宥義